

KPOS JPOA exchange fellowship

名古屋大学医学部整形外科学教室

鬼頭 浩史

第15回日本小児整形外科学術集会において最優秀ポスター賞をいただき、KPOS-JPOA exchange fellow として2005年10月11日から15日まで韓国ソウルを訪問させていただきましたので、ご報告いたします。

出発前に Seoul National University Children's Hospital (以下、こども病院) の Tae Joon Cho 先生のご尽力により、丸3日の滞在を KPOS (韓国小児整形外科学会) 発表、KOA (韓国整形外科学会) 参加および施設見学 (Korea University Medical Center Guro Hospital) で過ごすスケジュールが決まりました。初めての韓国訪問であったため、発表以外の日は観光をメインにと密かに期待していましたが、私の学問的要望を次々と尋ねてくる Cho 先生を相手にして、そのような願いは不謹慎かと反省し、しっかり勉強することを心に決め旅立ちました。

初日は仁川空港に夕方の到着となり、空港まではこども病院の Won Joon Yoo 先生に出迎えていただきました。激しい渋滞のなか、名古屋からソウルまでのフライト時間とほぼ同じ時間をかけてようやくこども病院周辺に到着しました。このあたりは学生街で、若者を中心に夜でもにぎわっていました。こども病院の Clinical fellow を交えて、KPOS 発祥の地といわれるレストランでプルコギを舌鼓をうちながら、Yoo 先生とは同年代ということもあって仕事や家族、趣味の話などで盛り上がりました。

翌日の午前中は、こども病院に KPOS の President である In Ho Choi 教授を訪れました。Choi 教授は大変気さくな親日家で、部屋には日本語の医学書まで置いてありました。これまでにこども病院を訪れた JPOA の著名な先生方のサインをコレクションされており、私も恐縮しながらノートの片隅にこそっと名前を残してまいりました。その後、Yoo 先生に院内を案内していただきました。韓国でも病院間の競争は激しいようで患者サービスが行き届いており、病院の玄関ではドアマンが待ちかまえており、エレベーターではなんとエレベーターガールがにこやかに微笑んでいました。病院と隣接する研究所を見学してから、KPOS の学会場であるヒルトンホテルへと移動し、KPOS board member と昼食のち学会参加となりました。会場は一つで、参加者も50名程度と少人数でしたが、国内学

図 1.
Y●●先生(左)とカラオケスナックにて



会であるにもかかわらず英語で発表するドクターもおり、それぞれの演題に活発な討論が繰りひろげられていました。特に、韓国人ドクターたちの流暢な英会話には驚嘆しました。私は約 15 分間、「培養骨髄細胞移植と多血小板血漿を併用した脚延長術の臨床成績」について発表させていただきました。韓国でも細胞移植はさかんになりつつあるようで、いくつか質問もありましたが、何とか無事に発表を終えることができました。夜は KPOS member と韓国伝統料理店での大宴会となりました。ゲストとして手厚くもてなされ、かつ無事役割を終えた安心感もあり、ハイペースで気持ちよく飲んでいたのですが、そろそろお開きかと思った瞬間に壮絶な世界が待ち受けていました。お互いの腕を組みながら、ウイスキーのビール割りをいっき飲みして空のグラスを鳴らすという KPOS スタイルでの歓迎が次々と襲ってきたのです。あっという間にボトルが数本空けられ、ふらふらになりながらもなんとか親交を深めることができましたようです。さらに二次会のカラオケスナックでも宴は延々と続き、Korean パワーに圧倒されながらも、日本代表としてアルコールに、歌にと対抗してまいりました(図 1)。

翌日までアルコールが残ったのはいうまでもなく、鎮痛剤で頭痛を抑えながらの K●A 参加となりました。こじんまりとした KPOS に比べ、さすがに韓国版の日整会である K●A は参加者も多く、3つの会場はすべて聴衆でいっぱいでした。KPOS および K●A に招待されていたハーバード大学の James R. Kasser 教授の講演を中心に聴講しましたが、内容は先天性股関節脱臼、大腿骨頭すべり症から、肘関節近傍の外傷や Vascular anomaly まで多岐にわたっており、その見識の広さには驚きました。ちなみに、Kasser 教授は今でも毎朝 5 時前には起床して paper work をこなしているそうです。午後はお待ちかねのソウル観光となりました。Y●●先生に案内していただき、昨年開館したばかりの美術館、



図 2. 昌徳宮(チャンドックン)



図 3. Seoul National University Children's HospitalのCho先生(左)とY先生(右)

Leeumを訪れました。ここは韓国の大手家電メーカー、サムソンが経営しており、Samsung Lee+museumでLeeumと名付けられたそうです。3つの建物からなるきわめて近代的な外観で、韓国の伝統的な古美術から現代美術常設館まで内容も多様なすばらしい美術館でした。またハイテクを駆使しており、館内ではPDA端末を手渡され、各展示品の前の床下に埋め込まれた赤外線を受信すると、作品についての説明が自動的に始まる仕組みになっていました。さらに、ソウルにある5つの古宮の中の1つ、世界文化遺産である昌徳宮(チャンドックン)に移動しました。美しい宮殿の庭園、秘苑(ピウォン)および広大な宮殿を、約1時間の日本語ガイドツアーで堪能しました(図2) あっという間に時間は過ぎ、夕食はCho先生、Y先生とともに、ソウル市内のレストランで、イタリア料理とワインを満喫しました(図3)。

3日目は韓国のIlizarov manといわれているHae Ryong Song先生にお世話していただきました。彼はTissue Engineeringにも興味があり、韓国のNIHの研究者とともに軟骨再生の仕事もしており、私の発表に大変興味を示してくれました。驚いたことに、私の知らない間にNIHでもう一度発表するように話が進んでいました。今度は、整形外科的な知識のない研究者を前にして、約1時間の発表および討論で冷や汗をたっぷり流しました(説明のいたらないところは、Song先生に韓国語でフォローしていただき助かりました)。その後、ヒルトンホテルに戻り、Tissue Engineeringを手がけるベンチャー企業の方々と面談となりました。昼食をとりながら彼らに3度目の話(冷や汗?)をするはめになりました(3回も活躍でき、持参したCDも本望かと思います)。その甲斐あってか、今回用意したデータは臨床結果が中心であったため、改めて基礎研究のデータを話しに来るようにと

図 4.
Guro Hospital の Song 先生(左から 2 人目)



いうありがたいお言葉をいただきました。午後は Guro Hospital を訪れ回診，カンファレンスに参加しました。また，骨系統疾患の症例も提示していただき，Song 先生とアカデミックな意見交換をすることができました。彼は Little People of Korea でも積極的に活動し，さらにはそれに関するドキュメンタリー番組にも出演しており，韓国における小人症の父といった存在のようです。夜はインドからの留学生 2 名とともに，焼き肉(彼ら 2 人は宗教上牛を■にすることはできず，申し訳なく思いましたが)と韓国冷酒で盛り上がり，日付が変わるまで韓国での最後の夜を楽しみました(図 4)。

連日，早朝から深夜までびっしりのスケジュールで，大変充実した日々を過ごすことができました。アルコールを介しての交流が中心でしたが，私にとっては学ぶことも多く大変有意義な滞在となりました。小児整形外科領域の international journal に publish される論文の敬および内容から，韓国医療のレベルの高さは理解しておりましたが，今回，そのことを再確認するに至りました。KPOS の構成員は少数精鋭で，一人ひとりは大変クレーバーかつエネルギーで，KPOS メンバーであることに誇りを感じているようです。お互いに切磋琢磨しあって，ハイレベルな医療を展開する彼らを目の当たりにし，これまでの我が身を反省するとともに，新たな刺激に身が引き締まる思いで帰ってまいりました。今後もこのような fellowship により，さらに日韓の交流が深まっていくことを期待しています。最後に，貴重な経験をさせていただきまして，KPOS，JPOA 両学会のメンバーに感謝いたします。